

# 主 語 に つ い て (その1)

高 島 直 樹

## On the Notion of Subject (I)

Naoki TAKASHIMA

### I. 序 論

従来の変形生成文法 (Generative transformational grammar) の研究の対象となってきた単位は、主に文 (Sentence) である。Chomsky (1965) が、「文法は文法的な文を生成し、しかも、文法的な文のみを生成する規則の体系である」と述べている如く、その考察対象は文に向けられている。しかも、その文というのは、situation から抽出された文ではなく、まず文を作り、それを考察するに当たり、situation を考慮するという立場がとられてきたように思われる。無限にある situation から文を抽出することは不可能なことであり、無限個の文を生成するために有限個の規則の体系を立てようとする試みは、正しいものであるが、その際、situation をあまりにも考察の対象としていないことに問題がある。文法は言語能力 (competence) に関するものであるとする Chomsky にとっては当然のことかもしれないが、ここで筆者が強く主張したいことは、言語能力としての文法も重要であるが、それだけでは不十分なものであり、言語の本質をとらえるためには、これまで言語運用 (performance) に属するものとされてきた面での研究が必要であるということである。

言語の機能の本質は何か、ということを考えてみると、それは、communication の手段であるということであり、この performance に属する面での事実を認識することなくして、言語の十分な実体把握は不可能なことである。

そこで、この communication を構成するものは何かということを考えてみると、まず、一番基本的なものとして、話し手 (speaker) と聞き手 (hearer, もしくは, hearers) の存在がある。(音声を媒体としないで、文字を媒体する場合は、writer と reader, もしくは, readers)<sup>1)</sup> いずれの場合にも共通するのは、communication は、何らかの situation の中で進行するということである。

今まで、situation という言葉を、何の規定もなく使ってきたが、ここで、筆者が使う situation というものを明確にしたい。situation を構成するものとして、まず、speaker, hearer の存在及び

\* 1976年11月6日受理

1) 以下、communication の在り方として一番基本的な speaker-hearer の形を対象とする。

認識の世界, そして, communication が行なわれる場, すなわち, 外界状況 (現実世界), そして, communication の進行に伴う文の前後関係が考えられる。そして, 最後のものを context と呼ぶことにする。

ここで, これらの situation がいかに現実の発話にかかわっているかを, 具体的な例で示すことにする。まず, 次の文を考えてみよう。

- (1) The rats were killed by fire.
- (2) The rats were killed with fire.

(1), (2)における前置詞の相違は, 「ねずみ達が殺された」という出来事を, speaker が偶然の火事によるものと認識している (この場合には, 前置詞は *by*)か, それとも, 誰かが故意に火を使ったことによるものと認識している (この場合には, 前置詞は *with*)かによるものである。言語の本質は, まさに, この認識作用ということにある。「文は人なり」という言葉があるが (抽象的な文というものではなく, 実際に人が発する文という意味で), これはまさしく言語の本質を突いた言葉である。言語というものは, ある個人が外界あるいは内界の状況, 物事, 出来事をいかに認識しているかをあらわすものだからである。先に, 言語の機能の本質は, communication の媒体であることに存すると述べたが, 言語そのものの本質は, この外界, 内界の認識作用にある。この認識作用は, もちろん, ある言語を使う集団内の個々の構成メンバー間でそれぞれ異なるものであるが, それと同時に, その使用する言語による制約をも受けるものである。例えば, 日本語と英語を考えてみると, 日本語では同じ親から生まれた人々を示す場合, 性別だけでなく年令の上下関係によっても区別して, 「兄」・「弟」・「姉」・「妹」という単語があるが, 英語では, 単一の語としては, 性別だけによる区別によって, *brother, sister* の二語をもつだけである。このように, 日本語と英語の間には, 同じ対象に対して認識の仕方に相違がある。本論では, 英語において, 認識作用というものがいかに言語に反映されているかを考えることにする。

第二の外界状況 (現実世界) が言語にかかわる例を考えてみよう。

- (3) There is a boy by the bank.

例えば, (3)の文は, これだけを取り出して考えれば曖昧な (ambiguous) 文であるが, この文が発せられる際の外界状況によって, 一義的な文になる。つまり, ある少年が, (3)の文が発話される時点で, 現実に存在している場所が土手のそばであれば, (3)の文は, 「土手のそばに一人の少年がいます」という意味になる。もし, それが銀行のそばであれば, (3)の文の意味は, 「銀行のそばに一人の少年がいます」になる。このように, 実際にある文が使われる communication の場, 外界状況というものを考えれば, その文だけを考えた時には ambiguous な文が, unambiguous な文になるというように, 言語は外界状況からも束縛を受けているのである。

次に、第三の文の前後関係、すなわち、context と実際の発話文とのかかわりを考えてみる。次の文を考えてみよう。

(4) The man was reading a newspaper on the bench.

(4)の文は、文法性に関しては問題がないが、実際の発話の導入文としては不適格な文である。しかし、(4)の文の前に(5)の文があれば、(4)の文は適格な文となる。

(5) I met a man in the station.

このように、ある文が現実の発話として適格なものとなるためには、その前にある種の発話を必要とすることがある。このことは、文を考察する場合には context を考える必要があることを示している。

以上、situation を構成する三要素——speaker と hearer の認識の世界、外界状況、そして、context——について考察してきた。が、この三要素は、以上のそれぞれの例についてももう少し深く考えてみるならば、一つにまとめられることがわかる。それは、speaker と hearer, 両者の認識の世界である。第二の外界状況の例について言えば、hearer が(3)の文が発話された際の外界状況をいかに認識しているかによって、その意図された意味が理解されるのである。第三の context についての例においても同様で、(4)が適格な文であるか否かは、speaker と hearer の認識の世界に、(5)のような文によって表わされる a man の存在があるかどうか依存しているのである<sup>2)</sup>。故に、situation の中で言語を考えるというのは、とりもなおさず、speaker と hearer の認識の世界と言語の関り方を考えるということである。そして、これが本論で考察しようとすることである。しかし、認識の世界と言語の関り方と言っても非常に漠然としているので、対象を絞って、これまでいわゆる主語 (Subject) と呼ばれてきたものを、speaker と hearer の認識の世界といかなる関り方を行っているかという観点から、考察しようとするものである。

## II. 歴史的概観

そこで、まず今まで Subject というものがどういう取り扱いを受けてきたかということ、伝統文法の代表として Jespersen, 変形文法の代表として Chomsky, Fillmore の考え方に見ることにする。

### 1. Jespersen の考え方

まず、Jespersen (1924) は、彼以前の Subject に対する見解の概略を次のようにまとめている。

(1) Subject となるものは、比較的よく知られた要素であり、それに新しい情報として述部 (Predicate) が付け加えられる。この考え方を示すものとして、Baldwin から次の引用をしている。

[Jespersen (1924), p. 145]

2) speaker, hearer の認識の世界については、III において詳しく述べる。

“The utterer throws into his subject all that he knows the receiver is already willing to grant him, and to this he adds in the predicate what constitutes the new information to be conveyed by the sentence... In ‘A is B’ we say, ‘I know that you know who A is, perhaps you don’t know also know that he is the same person as B’” (Baldwin’s Dict. of Philosophy and Psychol. 1902, vol. 2. 364)<sup>3)</sup>

こうのように、Subject は Old information を、Predicate は New information を伝えるという考え方の反例として、Jespersen は、*Who said that?* の答となる場合の *Peter said it.* という文においては、*Peter* は New information であり、*said it* は Old information であると言っている<sup>4)</sup>。

(2) Predicate は、最初不定なものであり、明確でないものを、明確に限定するものであり、Subject は、このような Predicate によって明確になるものである。

(3) Subject は、あるものについて語る場合のあるものであり、Predicate は、そのあるものについて語られる部分である。そして、Jespersen は、この考え方を Subject と Topic を同一視するものだと言う<sup>5)</sup>。そして、*John promised Mary a gold ring.* という文において、この文が何について語っているかというのは、4つの可能性、つまり、① *John*, ② *promise*, ③ *Mary*, ④ *a ring* の4つが考えられ、故に、これら4つの各々を Subject と呼ぶことができる場合があることになると言っている<sup>6)</sup>。

次に、Jespersen は、Subject の定義に関する曖昧さが、言語学者や論理学者が Psychological Subject, Psychological Predicate, Logical Subject, Logical Predicate というようなことを言い出す原因となっていると述べ、それらについての諸説をまとめているが、重要なところを要約することにする。〔Jespersen (1924), pp. 147-150〕

#### (4) Gabelentz の説

まず、hearer は、A という単語を理解する。次に、hearer は、A がどうなんだということをたずね、B という情報を得る。次に、A+B についてどうなんだとたずね、次の情報 C を得る。このように、まず A から出発して次々と (A)+B, (A+B)+C, (A+B+C)+D, ...〔( ) は、hearer が既に知っていることを表わす〕というように情報を得てゆくとする。この場合、speaker は両方も (つまり、最初の例で言えば A, B) 知っているのであるが、何故最初に A を言うのかというと、彼にまず考えさせるものを最初におき、次にそれについて考えることを言うからであるとする。そして、前者、即ち、上の例の ( ) に入った部分が Psychological Subject であり、後者が Psy-

- 3) こういふ考え方は、III において述べるように、Subject の働きの一部を、不完全ではあるが、とらえているものである。
- 4) communication 中のある文の要素が Old information であるか、New information であるかということは、非常に重要なものであり、本論での Subject についての考察に有力な示唆を与えてくれたものである。詳しくは III において述べる。
- 5) 本論では、Subject の重要な働きの1つは、Topic (III においては Theme という術語を使う) を表わすことであると考えられる。
- 6) *John promised Mary a gold ring.* という文において、Jespersen の言う (2) *promise*, (3) *Mary* (4) *a ring* は、Comment (III においては、Rheme という術語を使う) にはなり得ても、Topic (Theme) にはなり得ないものである。

chological Predicate であるという<sup>7)</sup>。

Jespersen は、この考え方に対して、Psychological Subject, Psychological Predicate の関係と、Subject, Predicate の関係の類似はそれ程緊密なものではないので、両方に対して同じ名称を使うことはできないとし、しかも、実際の言語における語順というものは、心理的な理由によってのみ決められるのではなく、それぞれの言語特有の慣用上の規則によって決められるのがほとんどである。即ち、個々の speaker の意志によって決められるものではないと言う。

(5) Sweet の説

Sweet [(1891), p. 48] は、*I came home yesterday morning.* という文においては、*came* はそれだけで Grammatical Predicate であるが、*came home yesterday morning* は Logical Predicate であるという。また、*Gold is a metal.* という文においては、厳密な意味での Grammatical Predicate は *is* であり、Logical Predicate は *metal* であると言う。

(6) その他の説

受動態文において、もし同じ意味を能動態で表わすならば Subject となる部分を、Logical Subject という。例えば、*He was loved by his father.* (active turn: *His father loved him.*) における *his father* は、Logical Subject であると言う。また、*It is difficult to find one's way in London. It cannot be denied that Newton was a genius.* というような文においては、*it* は Formal Subject であり、不定詞句、*that*-clause は Logical Subject であるとする。

(7) Jespersen の説

以上のように、Subject, Predicate, 及び、その前に、logical, psychological, formal 等がついたものに関し、様々な定義付がなされてきたわけであるが、Jespersen はそれらを検討した上で、Subject, Predicate という術語を、Grammatical Subject, Grammatical Predicate という意味においてのみ使うことを提案している。そこで、Jespersen のいう Grammatical Subject, Grammatical Predicate がどういうものかということが問題になる。Jespersen [(1924), p. 150] によれば、Grammatical Subject としての Subject は、文における必ずしも唯一の primary とは限らないが、Subject は常に primary である。また、このことは、Predicate がそれ程限定されたものでないのに反して、Subject は比較的限定されたものであり、特殊なものであるということに等しいという。そして、動詞 *be* の後に Predicate (Predicative というのは、*The man is a painter.* における *a painter*, Predicate は *is a painter* であるというように、Jespersen は Predicate と Predicative を使い分けている。) が続く場合に、どちらが Subject かという問題が生じると考え、これに対し Jespersen は、次の原則を立てている。

(a) 一つの名詞が限定されたものであり、他方の名詞が不定のものである時には、限定された

7) この考え方には、はっきりしない点もあるが、Subject というものを、speaker, hearer の認識との関わりにおいてとらえようとしている点で、Subject の働きの一部をとらえていると考えられる。詳しくは III を参照。

ものが Subject である。名詞が次の(6)におけるように固有名詞である場合が、この原則にあては

(6) Tom is a scoundrel.

まる。また、名詞の前に定冠詞等 (例えば, *the, my, this, that*) がつくことによっても、その名詞は限定されたものになる<sup>8)</sup>。次の(7), (8)が、その例である。

(7) The thief was a coward.

(8) My father is a judge.

(b) *is* によって結びつけられる名詞が同程度に不定である場合は、どちらが Subject であるかというのは、それぞれ名詞の外延 (extension) (概念の適用せらるべき事物の範囲) の大きさによって決まる。つまり、外延の小さな方が Subject である。例えば、

(9) A lieutenant is an officer.

(10) A cat is a mammal.

(11) A mammal is an animal.

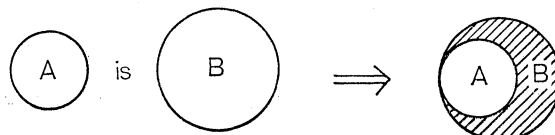
(9)においては、*lieutenant* と *officer* の外延を比べると前者の外延の方が小さいので、前者が Subject である。(10)の場合は、*cat* の方が *mammal* に比べて外延が小さいので *cat* が、(11)においては、*mammal* の方が *animal* より外延が小さいので *mammal* が、各々 Subject である。更に、Jespersen は注目すべきことを述べている。上の (9), (10), (11) の例においても同様であるが、次の(12), (13)においては2つの名詞は同程度に不定であるが、そこには相違がある。即ち、Sub-

(12) Thieves are cowards.

(13) A thief is a coward.

ject となるものは、総称的 (generic) な意味を表わし、predicative となるものは、個別的 (individual) 意味を表わすということである。しかし、これは先に述べた外延の大きさに起因するものと考えられる。これを図示すると、(14) のようになる。A は総称的な意味をもち、B については

(14)



斜線を施した部分には言及していないのであるから、B は個別的の意味しか持ち得ないことになるのである。

8) 限定されたものという言い方は、非常に漠然とした言い方であるが、これは III において、speaker が hearer の認識の世界にあると認識しているもの、というものでとらえられる。

(c) 2つの名詞が共に限定されたものである場合、例えば、(15)、(16)の場合、Jespersen は、

- (15) My brother was captain of the vessel.  
 (16) The captain of the vessel was my brother.

my brother は(15)における方が、(16)の場合よりも限定されたものであると言う。つまり、(15)においては、私の唯一の兄なり弟を指すか、今話題にのぼっている私の兄なり弟を意味し、故に、限定されているので *my brother* が Subject であると言う。(16)においては、いく人かいる私の兄弟の内の一人を意味するか、又は、私に兄弟が何人いるかを問題にしない場合で、限定の度合いは低く、*the captain of the vessel* が Subject であるという。Jespersen は、限定の度合いというものを問題になっている語についてのみ考えているのである。名詞に不定冠詞、又は、総称的意味をになう *the* がついている場合には、この態度は正しいと思われるが、定冠詞本来の機能をもつ定冠詞がついている名詞について考える場合には、その定冠詞がつくことになる原因、つまり、その文が発せられる *situation* というものを考慮に入れなければならない。例えば、Jespersen は、(17)、(18)

- (17) Miss Castlewood was the prettiest girl at the ball.  
 (18) The prettiest girl at the ball was Miss Castlewood.

の文のように2つの名詞(句)を入れかえられる場合は、固有名詞をより特殊なものと考え、それ故、Subject であると考えるのが自然であると言っているが、(18)の文は、これが使われる *situation* を考えれば、*the prettiest girl at the ball* を Subject として持っていると言わざるを得ない<sup>9)</sup>。

以上みたように、Jespersen は、Subject を機能的な観点から見れば、primary であり、意味的な観点から言えば、Predicate より比較的限定されたものであり、特殊なものであると規定する一方、統語的基準として、Jespersen [(1933), p. 98] は次のように述べている。ある文で使われている動詞をそのままの形でとり出し、その前に *who* (又は、*what*) を付けた疑問文を作り、そして、その疑問文の答となるものが Subject であると規定している。例えば、(19)から(20)である。(二重下線は筆者)

- (19) Tom beats John. (Who beats? Tom.)  
 (20) John is beaten by Tom. (Who is beaten? John.)  
 (21) Fire destroyed the building. (What destroyed? Fire.)  
 (22) The building was destroyed by fire. (What was destroyed? The building.)

## 2. Chomsky の考え方

Chomsky (1965) は、伝統文法において明確に規定されていない Subject という概念を、ほぼそのまま踏襲しているように思われる。例えば [Chomsky (1965), pp. 63-74], (23) の文について伝

9) III において、もう一度述べる。

